

古代・初期中世トランスオクシアナにおける貨幣流通

——独自の硬貨製造をめぐる——

E. V. ルトヴェラーゼ

(久保一之訳)

【訳者記】 本稿は平成10年3月9日京都大学人文科学研究所における講演（ロシア語、原題はИз истории денежного обращения в Трансоксиане）の内容を日本語に訳したものである。翻訳するにあたって、同研究所の桑山正進氏と東海大学の春田晴郎氏に専門的な助言を賜わり、また、長期留学を終えて最近ウズベキスタンから帰国された若手考古学者、川崎建三氏からも有益な助言を得た。ここに記し、三氏に深甚なる謝意を表す。

なお、末尾に図示された硬貨はあくまで参考例であり、必ずしも本文中に言及された硬貨そのものではないと了解されたい。

I

中央アジアにおける独自の硬貨製造のはじまりについては、つい最近まで、編年的側面や地理的側面、つまり、いつどこで流通貨幣として硬貨が使用され始めたのか、という問題のみ検討されてきた [Gafurov 1952: 87-92; V. M. Masson 1955: 46]。その初期の傾向や特徴は、近年発表されたゼイマーリの一連の研究においてのみ、十分な古銭資料によって理論的かつ具体的に裏付けられている [Zeimal' 1983 a: 61-81; id. 1983 b: 71-76]。

ゼイマーリの見解によれば、トランスオクシアナにおける貨幣流通のおこりと独自の硬貨製造のはじまりは、以下のようなものである。まず最初に、宝物として外来の硬貨がこの地に流入する。その中には、アケメネス朝硬貨、紀元前5～4世紀のギリシア諸都市の4ドラクマ貨やドラクマ貨だけでなく、セレウコス朝やグレコ=バクトリアの硬貨も含まれる。その後、各々の地域に最も馴染んだ外来の硬貨を模して、これらの硬貨の模造が開始された。外来硬貨の模造は、硬貨製造の最初の形式であるだけでなく、すでに貨幣流通が発達していた国家と隣接する地域・国における、貨幣流通の最初の形式でもある。この過程の最終段階が独自の硬貨発行であるが、これはトランスオクシアナのいくつかの地域に限定される可能性がある。

しかし、大筋でこのゼイマーリの仮説を支持するとしても、やはり不明な点が残る。それは、セレウコス朝硬貨、それから特にグレコ=バクトリアの硬貨が、ソグドやバクトリア北

部にとって外来のものであったのか、という問題、あるいは、これらの硬貨は、上述両地域がヘレニズム諸国家に組み込まれたために流通したのではないか、という問題である。これは紀元前3～2世紀のトランスオクシアナの政治史に関わる問題であるが、その政治史自体が、乏しい文献史料からの情報と、まさにこの古銭学的データに基づくことになるのである。

セレウコス朝とグレコ=バクトリアの硬貨が、流通貨幣ではなく、常に宝物としての役割を果たした、というのは疑わしく、硬貨が製造された国家の領土外へはめったに流出しない銅カルクス貨がよく出土するのであるから、なおさらである [Rtveladze 1984]。出土した遺跡の状況は明らかではないが、おそらくこの地で発見されたアムダリヤー一括遺物（いわゆる「オクサスの遺宝」）に含まれる、アケメネス朝のダリク貨やシクル貨、あるいは紀元前5～4世紀の硬貨、すなわちアケメネス朝下小アジアのサトラップの金スタテール貨、アテネ硬貨に倣った模造硬貨、マケドニア王の硬貨などは、中央アジアにとって、持ち込まれた外来のものであろう。

近年南トルクメニスタンにおいて、表面の王冠（ティアラ）に弓が描かれ、様々な追刻のあるアケメネス朝の銀シクル貨の一括遺物が発見された。ビリュコフはこの一括遺物から二つの硬貨を紹介し、この地域がアケメネス朝ペルシア帝国の貨幣流通の領域に含まれていたのではないか、という問題を提起した [Biriukov 1995]。しかし、これらの硬貨は、おそらく物々交換の世界にある程度入り込んでいたであろうが、その後の中央アジア貨幣史にいかなる痕跡も残さず、この地で硬貨製造が始まる基盤とはならなかった。これに対し、セレウコス朝の硬貨、それから特にグレコ=バクトリアの硬貨は、数世紀の間に、中央アジアにおける貨幣流通と硬貨製造の開始および発展を決定付けた。これらの硬貨が基盤となって、最初は模造硬貨、ついで独自の硬貨が製造されるようになったのである。

また、古銭学的データの分析結果によれば、先述のゼイマーリの仮説は、広く通用するものではなく、トランスオクシアナに含まれる様々な歴史的・文化的地域において、独自の硬貨製造のはじまりが多様であったことは明らかである。本稿の目的は、古代・初期中世において、これらの地域で硬貨製造が始まるパターンの相違を分析することである。

II

バクトリア（トハーリスタン）北部

この地域における貨幣流通は、セレウコス朝期、おそらく紀元前3世紀前半に起こっている。この地域で出土した最も早い時期の硬貨は、パルフェーノフ G. Parfenov のデータによれば、スルハンダリヤ州ダルバンド地区で発見された、マケドニアのアレクサンドロスか、あるいはセレウコス1世のドラクマ貨である [図：硬貨1]。この地区からは、これまで既に、アンティオコス1世（紀元前280-261年）のセレウコス朝硬貨11個が出土している。

その内訳は、タフティサンギーン遺跡出土のカルクス貨4個 [Zeimal' 1983 a: 66-68], 古テルメズ出土のドラクマ貨3個とカルクス貨1個 [Rtveladze 1988 a: 72], デナウ地区出土のカルクス貨1個, カンピル・テペ出土のカルクス貨2個 [Rtveladze 1989: 47-49] である。複数の遺跡で銅カルクス貨が出土していることから、小規模な小売商売が発達していたことは明らかである。また、この硬貨が、当該地域にとって外来のものではなく、発行した国家の領土における商業活動に用いられた、国家の貨幣であったことも明らかである。

この地域において発見されたグレコ=バクトリアの硬貨は、量が多く、また多様である。最新のデータによれば、全部で70個以上の硬貨が出土しており、その中には銀の4ドラクマ貨、ドラクマ貨、オボル(6分の1ドラクマ)貨、それから銅の2カルクス貨とカルクス貨がある。そして、これらの中に、ディオドトス、エウテュデモス、アンティマコス、アガトクレス、エウクラティデス、デメトリオス、アポロドトス、ヘリオクレスといった、全ての偉大なグレコ=バクトリア王たちの硬貨がある [図: 硬貨3~6]。これらグレコ=バクトリア硬貨の大部分、50個以上の出土地がアムダリヤ流域に集中している(タフティサンギーン16個 [Zeimal' 1983 b: 48-57], 古テルメズ20個以上 [Rtveladze 1988 a: 72-73], カンピル・テペ15個 [Rtveladze 1984])。2番目に多いのはスルハンダリヤとカラタグダリヤの流域(ダルヴェルジン・テペ, デナウ, レガル, ハルチャヤン, ハイラーバード・テペ, シャフリナウ)で、13個出土している [Rtveladze 1984]。これらの硬貨は、出土状況によって、3つのグループに分けることができる。すなわち、月氏やクシャン時代の層から出土したもの、さらに下の層から取り出されたもの、ヘレニズム時代の陶器を含む層で発見されたもの、という3グループである。

ゼイマリーの見解によれば、紀元前3~2世紀中央アジアの大部分の地域が、テルメズ付近を除いて、いまだ貨幣経済の洗礼を受けておらず、貨幣が存在しなかった時に、外来のものとしてグレコ=バクトリア硬貨が流入してきた、ということになる [Zeimal' 1978: 197]。しかし、この説が成り立たないことは、既に明らかにされている [Pugachenkova & Rtveladze 1983]。北部バクトリア全域において、グレコ=バクトリア硬貨は外来のものではなく、この地域は、これらの硬貨を発行し流通させていた国家の統治下にあったのである。こうして、上で分析したデータが示すように、アムダリヤ一括遺物(「オクサスの遺宝」)タイプの怪しげな遺物群ではなく、客観的かつ具体的なヘレニズム硬貨群があれば、これらの硬貨が中央アジアの一地域、この場合バクトリア北部へ、外来のもの、あるいは宝物としてではなく、発行した国家の領土において流通する、国家の貨幣として入ってきたことが明らかになるのである。

この地域における貨幣流通の次の段階は、エウテュデモス、エウクラティデス、デメトリオス、ヘリオクレスらグレコ=バクトリア諸王の4ドラクマ貨、ドラクマ貨、オボル貨などの模造であり [図: 硬貨8, 9], 事実上この地域全体に広まっている。紀元前後か紀元1世紀初めには、ある程度グレコ=バクトリア硬貨をもとにし、またある程度新しい要素をも加

えて、独自の硬貨製造が始まった可能性がある。それは“ヘラオス”，サパドビゼス，フセイガカリスら月氏の支配者たちの硬貨で，主にオボル貨であるが，“ヘラオス”の4ドラクマ貨もある [図：硬貨 10, 11]。

この地域の西南部はミスリダート2世（紀元前124-88年）のドラクマ貨とオロード2世（紀元前58-39年）のカルクス貨に始まり，ゴータルズ2世（紀元前50-43年）のカルクス貨に終るパルティア硬貨の流通地帯に組み込まれる。そして，フラハート4世（紀元前38-2年）の硬貨を模造した，青銅や銀の硬貨がある程度広まったが，これには，しばしば土着の支配者の肖像が描かれていた [Rtveladze 1995]。

その後クシャン帝国に編入されると，バクトリア（トハーリスターン）北部では，カルクス貨を主とするクシャン硬貨が流通するようになる。それは紀元1世紀半ばから3世紀半ばまでのことで，この地域で発見されたクシャン硬貨の量は膨大であり，クシャン金貨の出土についてもよく知られている [Rtveladze & Pidaev 1997]。

3世紀半ばのクシャン帝国の崩壊により，フヴィシュカ，ヴァースデーヴァ1世，カニシュカ3世のクシャン硬貨を模造した，青銅硬貨の大量生産が促進され [図：硬貨 18, 19]，その後，紀元3世紀末から4世紀にはクシャン=ササン朝のカルクス貨，同じく金ディーンナル貨 [図：硬貨 20] が製造された [Rtveladze & Pidaev 1997]。

紀元5～7世紀，バクトリア（トハーリスターン）北部は，ペーローズ（紀元459-484年），ホスロウ1世（紀元531-579年），ホスロウ2世（紀元590-628年）のササン朝ドラクマ貨 [図：硬貨 28, 29] の流通地帯に組み込まれるが，この地域において，それらの硬貨には様々なバクトリアやソグドの銘文，紋章，図柄が追刻されていた [図：硬貨 30]。そして，これらに基づいて，この地域で銀製模造硬貨 [図：硬貨 31, 32] の大量生産がおこるのである [Rtveladze 1987]。

ケシュとナフシャブ

ケシュとナフシャブは古のナウタカとクセニッポスに対応し，歴史地理的には南ソグドと一括されることが多い。この地域における独自の硬貨製造のはじまりとその経緯については，あまりわかっていない。この地域で出土した最も早い時期の硬貨は，アレクサンドロスか，あるいはアンティオコス1世の4ドラクマ貨 [図：硬貨 2] で，これはカルシ近郊で発見された [Zeimal' 1983 a: 65]。グレコ=バクトリア硬貨も発見されており，(M. E. マッソンが言うところの) カシュカダリヤ東部のセギール・テベから出土したディオドトスのカルクス貨 [図：硬貨 3]，エウクラティデスのオボル貨 [図：硬貨 6]，ドラクマ貨，4ドラクマ貨を含むキターブ出土の一括遺物 [M. E. Masson 1928: 284]，シャフリサブズ郊外でカスターリスキーによって入手された，アンティマコスのカルクス貨3個がある [Kastal'skii 1940]。

セレウコス朝アンティオコス1世のドラクマ貨を模造した硬貨 [図：硬貨 7] がエル・ク

ルガンで発見されているが [Zeimal' 1983 a: 75], 正にここで, ギリシア風の名を持つユニークな土着の支配者の硬貨や, デメトリオスのオボル貨に倣った模造硬貨も発見された [Rtveladze & Nefedov 1995: 60-63]。おそらく南ソグドにおいて, 表面にヘラクレス, 裏面にゼウスが描かれ, 周囲にソグド語銘文があり, 紀元後最初の数世紀に見られる, 初期ソグドのオボル貨 [図: 硬貨 12] が製造された [Zeimal' 1973: 68-73]。この地域においてのみ, この硬貨が出土した地点が2ヵ所確認でき, それはカシュカダリヤ州東部の小クズビービーとトゥルトクル・テペである [Kabanov 1981: 77-90]。

これ以外の初期ソグド硬貨が出土することも, 今のところは珍しく, キターブのカランダル・テペでヒュルコデスのオボル貨 [図: 硬貨 13, 14] が発見され [M. E. Masson 1977: 26], また, シャフリサブズのズィンダーン・テペ (ウスマーノワ E. I. Usmanova による発掘) と大クズビービーにおいて, 裏面に弓の描かれた硬貨が発見された [Kabanov 1981: 77-80; Rtveladze 1988: 38-44]。

かりに, 古典時代の南ソグドにおける硬貨製造が仮説に過ぎないとしても, 後続の時代には, より確実な情報がある。この地域では, おそらく紀元4世紀か5世紀に, 表面に独特な髪形をした支配者の肖像, 裏面に勇者が獅子と対決する場面を描いた, 独自の形態の銅貨 [図: 硬貨 23] が製造された。この硬貨の歴史的解釈は, 表面にある複雑なソグド語銘文の解読を必要とするため, かなり困難である。スミールノワが提示したこの銘文の読み“KŠ'N”に基づいて, カバーノフは, クシャン帝国崩壊後ナフシャブで政権を握ったと思われる, 末期クシャン王朝によって発行されたもの, と見なした [Kabanov 1977: 97]。最近までナフシャブのみで出土していたことから, この硬貨を「ナフシャブ硬貨」と呼ぶよう, カバーノフは提案している。

一方 M. E. マッソーンは, 当該の硬貨について, 別の歴史的解釈を提示した。それは, この硬貨が, パルティア国崩壊後南ソグドにおいて強勢となったアルシャク (アルサケス) 朝の傍系によって発行されたもの, とする見解である [M. E. Masson 1977: 131-38]。

ソグド

この地域ではセレウコス朝硬貨とグレコ=バクトリア硬貨の出土が知られている。セレウコス朝硬貨では, セレウコス1世の2カルクス貨とアンティオコス1世のカルクス貨がアフラーシアアープとその近くのシーアープ川右岸から出土しており [Zeimal' 1983 a: 66-67], クルガン・テペからもオボル貨が出土している。グレコ=バクトリア硬貨の出土はさらに多く, エウテュデモスのドラクマ貨, デメトリオス, アンティマコス, ヘリオクレスの4ドラクマ貨, エウクラティデスのオボル貨 [図: 硬貨 6] などがある。

ソグドにおいて, トランスオクシアナで最も早い時期の, ヘレニズム硬貨の模造が見られる。それはセレウコス朝アンティオコス1世のドラクマ貨の模造銀貨 [図: 硬貨 7] で, ゼイマーリによって詳細に分析された。彼は, トランスオクシアナにおけるアンティオコ

ス1世の硬貨の模造開始は、紀元前3世紀末から紀元前2世紀初めのことで、紀元前1世紀半ばまで続いたと見なしている。ゼイマーリの見解に従えば、最終段階の模造は、既に独自の硬貨製造であると見なされ、弓の描かれた初期ソグド硬貨やヒュルコデスの硬貨〔図：硬貨13, 14〕と重複する〔Zeimal' 1983 a: 68-75〕。裏面に馬の頭部を描いたアンティオコス1世の硬貨の模造に取って代わった、裏面に弓の描かれた小さな銀貨も、また、ソグドで発行された初期の硬貨なのである。

ゼイマーリが提示した時代区分によれば、この硬貨の製造は、4期に分けることができる。第1期には裏面にギリシア語の銘文があり、第2期にはギリシア語銘文の模倣が見られ、第3期にはソグド語の銘文があり、第4期は銘文が読み辛く、ほとんど残っていない。このような硬貨製造は、おそらく紀元1世紀に始まり（第1期）5世紀まで（第4期）続いた〔図：硬貨21〕。分布状況から判断して、これらの硬貨は、ほぼ疑いなくサマルカンドで製造されたもので、現在のサマルカンド州とカシュカダリヤ州東部という比較的狭い領域、およびベンジセントにおいて流通していたと考えられる〔Zeimal' 1983 b: 269-71〕。

ブハーラー

この地域で発見された最も早い時期の硬貨は、グレコ=バクトリアのもので、ブハーラー近郊で出土した一括遺物に、ディオドトス、エウテュデモス、アガトクレスの4ドラクマ貨〔図：硬貨4, 5〕56個が含まれている〔Rtveladze & Niazova 1984; Rtveladze 1984〕。

この地域における独自の硬貨製造は、おそらく紀元前1世紀グレコ=バクトリアのエウテュデモスの4ドラクマ貨の模造〔図：硬貨9〕に始まったと考えられる。最初は不正確なギリシア語銘文を伴い（その後横に紋章が出現）、後にソグド語の銘文も見られるようになる。つまり、独自の硬貨製造において、模造が徐々に発展するのである。ゼイマーリはこれらの硬貨を「ソグド製」と呼んでいるが、より正確に、エウテュデモスの4ドラクマ貨に倣った初期ブハーラー製、と呼びたい。

おそらく紀元前1世紀から紀元4世紀の後半か末期まで続く、この硬貨の製造は、2期に分けられる。硬貨に描かれた支配者がヘアバンド（ディアデム）をしている紀元前1世紀～紀元1世紀と、支配者が王冠を戴いている紀元2～4世紀である〔Zeimal' 1978: 201, 209-10〕。ブハーラー州におけるこれらの硬貨の出土は、一括遺物も含めて、珍しくはない〔Rtveladze & Musakaeva 1986: 35-38〕。

おそらくブハーラー・オアシスの西南部では、エウテュデモスの4ドラクマ貨に倣った初期ブハーラー硬貨と編年上重複して、ヒュルコデスの小さな銀貨が製造されていた。このことは、最近ナイマルク A. Naimark が、クム・サウターン遺跡において当該の硬貨を数十個発見したことによって裏付けられる。ヒュルコデスの硬貨は、裏面の様式によって主に2つのグループに分けられ、一つは肩に炎のある神と銘文〔図：硬貨13〕、もう一つは馬に乗った神と銘文〔図：硬貨14〕である〔Livshits & Lukonin 1964〕。

このように、古典時代のブハーラー・ソグドは、地域内市場における独自の硬貨の需要に十分に応える、硬貨製造の一大センターであったのである。

紀元5～8世紀のブハーラー・ソグドは、貨幣流通のさらなる発展と硬貨製造の多様化に特徴付けられる。4～5世紀にブハーラー製4ドラクマ貨に代わって、支配者の肖像と「王モヴァチュ Movach」と読めるソグド語の銘文を持つ、小さな銀貨が登場する。また、同じくこの時期に、表面に支配者の肖像があり、裏面にはササン朝式拜火祭壇が描かれ、周囲に「王アスバール Asbar」というソグド語銘文がある銅貨 [図：硬貨 22] が大量生産された [Smirnova 1981: 28-30]。

5世紀半ばよりブハーラーではブハーラー・フダート銀貨の製造が始まる。この硬貨はササン朝ヴァラフラン5世のドラクマ貨に倣っており、ブハーラー式ソグド文字による「ブハーラー王」という銘文を伴っている。この硬貨の製造は、アラビア語銘文を伴ったブハーラー・フダート硬貨の模造が主流となる8世紀後半まで、あまり跡絶えることなく続くのである。

なお、シャフィルカン一括遺物の構成から判断すると、5世紀末～6世紀初頭にブハーラーの一地区において、表面に紋章のあるヴァラフラン5世のドラクマ貨の模造硬貨が流通した。それは、特に、表面に2こぶラクダ、裏面に拜火祭壇が描かれ、両面にソグド語銘文のある銅貨 [図：硬貨 24] である [Vainberg 1977: 176]。

全般に、ブハーラーにおける貨幣流通のおこりと発展、および独自の硬貨製造のはじまりは、トランスオクシアナの他のどの地域にも見られないほど、先述のゼイマリーの仮説に合致すると言うことができる。まず外来硬貨（ブハーラー一括遺物のグレコ=バクトリア硬貨）が流入、ついでエウテュデモスの4ドラクマ貨に倣った模造硬貨を製造、それからブハーラー製4ドラクマ貨という独自のタイプの硬貨を発行、となっているからである。

ブハーラーにおける貨幣流通は、最初からヘレニズム的伝統の強い影響を受けていた。このヘレニズム的伝統は、ブハーラー製4ドラクマ貨という独自のタイプの硬貨が出現したにもかかわらず、紀元4世紀まで、大きく変化した形態の中に残存していた。その後、この地域における硬貨製造は、ササン朝硬貨の強い影響を受けるようになり、7世紀半ばから8世紀には、おそらくソグドの硬貨製造を介して、パイケントの硬貨製造に見られるように、中国的伝統の影響をも受けるようになったのである。

ホレズム

この地域の特徴は、ヘレニズム時代において、貨幣流通も独自の硬貨製造も見られなかったことであり、外来硬貨もほとんど流入しなかった。グレコ=バクトリア硬貨が出土したのはわずか3遺跡に過ぎず、それは、エウクラティデスの4ドラクマ貨が出土したジャンバス・カラ、カルクス貨が出土したヤッケ・バルサーンの第5砦 [M. E. Masson 1928: 6]、エウテュデモスの4ドラクマ貨 [図：硬貨 4, 5] が出土したヒヴァである [V. M. Masson

1953: 164]。

ホレズムにおける独自の硬貨製造については、現在十分に研究されている。模範となったのは本来のヘレニズム硬貨ではなく、エウクラティデスの4ドラクマ貨の「バルバロイ的」模造硬貨であった。最も早い時期の硬貨は、グループAと分類された硬貨群によって代表される。これらの硬貨には、裏面のホレズム王の紋章とディオスクーロイに代わる騎士像、表面の王の肖像という、新しい要素の導入が、明瞭に見てとれる。

このグループには3つの段階があり、ホレズムの硬貨製造における政治的衝突を反映している。最も早い時期の硬貨は、V. M. マッソーンによってはじめて紹介されたもので、表面の人物像の描き方と裏面のホレズム王の紋章の存在によって、エウクラティデスの4ドラクマ貨と異なっている [V. M. Masson 1953: 164]。次の段階を示しているのがサマルカンド博物館所蔵の硬貨群 (A-II型) で、ヴァインベルグの見解によれば、第一段階 (A-I型) の硬貨に倣っている。最後の第3段階の硬貨群 (A-III型) には、先行段階の特徴をいくつか残しながらも、全く新しい変化が見られる。表面には顎髭のない王の肖像が出現し、その後方に王冠を授ける女神ニケの姿があり、また、裏面には馬上の騎士が描かれているのである。

グループAの硬貨は銀製で、重量は4ドラクマ貨に近く、時代的には紀元前1世紀後半から紀元1世紀初頭に属する [Vainberg 1977: 49-51]。しかし、第1段階の硬貨 (A-I型) が製造された場所は、判明していない。V. M. マッソーンは、それらがシルダグリア流域で製造されたと推定し [V. M. Masson 1953: 167-69]、一方トルストーフは、ホレズム製であると主張している [Tolstov 1963: 68-70]。また、ヴァインベルグは製造場所を特定しかねている。トランスオクシアナの南方で製造された可能性もあるし、グレコ=バクトリアの崩壊に関わった遊牧諸族によるホレズム征服後、ホレズムで製造された可能性もある。A-II型とA-III型の硬貨は、疑いなくホレズムにおいて製造されている [Vainberg 1977: 50]。

グループBの硬貨には多くのタイプがあり、表面に王の肖像、裏面には馬上の騎士が描かれ、ギリシア語銘文の残滓と、ホレズム文字による王の名と称号の銘文を伴っている。まさにこの時期、すなわちヴァザマル王の治世の少し前に、ホレズムにおける銅貨製造が始まり、この王の治世に銅貨の標準型が確立される。

ヴァインベルグの見解によれば、グループB第1段階 (B-I型) の硬貨群は、紀元1世紀の半ばか第3四半世紀頃のもので、ホレズム貨幣の新しく、かつきわめて重要な段階であったことを証明している。それらの硬貨には、紀元8世紀末までホレズム硬貨 [図: 硬貨26, 27] の伝統となる紋章がはじめて出現し、王の名と称号を伝える独自の銘文が見られるようになるからである [Vainberg 1977: 52]。B-I型の硬貨からは、先行段階の硬貨全てに見られた不正確な銘文がすっかり消え去り、ここにおいて、ヘレニズム的伝統と完全に決別したことを示している。

ウストルーシャナ

この地域における貨幣流通のおこりは、比較的遅い。カドフィセス2世の硬貨〔図：硬貨16〕を含むクシャン硬貨や、レニナーバード（現ホジェント）から出土したローマ硬貨の一括遺物〔Zeimal' 1983 b: 63-69〕を除くと、この地域における硬貨出土に関して、いかなるデータもない。おそらくローマ硬貨は、シルクロードを通じての交易に関係しているであろう。

ウストルーシャナにおいて独自の硬貨製造が始まったのは、紀元7世紀後半のことに過ぎず、その硬貨は、図像学的には折衷様式である。ビザンツ図像のササン朝の伝統が明瞭で、支配者の被り物の細部に反映されているが、直接現われたのではなく、チャーチュ硬貨を介しての間接的な影響である。それを裏付けるのが、特に、支配者の肖像が、当時の中央アジアやその隣接地帯の大部分の硬貨のように横顔ではなく、ビザンツやチャーチュの硬貨のように、正面から45度回転させていることである。さらに、支配者サタチャリの硬貨には玉座などインド的なシンボルも見られ、また、ロハンチュの硬貨にはキリスト教（ネストリウス派）の十字架が描かれている〔Smirnova 1981: 324-35〕。

このように、ウストルーシャナにおける独自の硬貨製造のはじまりは、中央アジアの他の地域とは全く異なっている。外来硬貨や国家発行硬貨の流通～「バルバロイ的」模造～独自の型を形成、という先行する諸段階がなかったのである。

チャーチュ

チャーチュで出土した最も早い時期の硬貨は、クシャン硬貨である。キンディク・テベ遺跡とプスケム川流域では、ソーテール・メガスの硬貨〔図：硬貨15〕やカニシュカの硬貨〔図：硬貨17〕が発見され〔Ernazarova & Kochnev 1978: 123〕、タシュケント天文台地区ではヴァースデーヴァの硬貨が出土している。チャーチュへのクシャン硬貨の流入は、おそらくシルクロードの一支線に沿う交易に関係しているであろうが、紀元一千年紀の早い時期にこの地域で貨幣が流通していたことを証明するわけではない。

チャーチュにおける独自の硬貨製造のはじまりは、バクトリア、ソグド、ホレズムとは異なった様相を呈している。外来硬貨や国家発行硬貨の流通～「バルバロイ的」模造～独自の型を形成、という先行する諸段階なしに、いきなりこの地域独自の硬貨製造が開始されたのである。最も早い時期のチャーチュ硬貨は、紀元1～2世紀という説も出されてはいるが〔V. M. Masson 1966: 80-81〕、おそらく紀元3～4世紀に製造されたものと考えられる〔M. E. Masson 1953〕。この硬貨は、膨らんだ形をしており、表面にデフォルメされた支配者の肖像、周囲には支配者の名と称号、それにチャーチュという地域名のソグド語銘文がある。中央アジアの他の地域で製造された同時代の硬貨の中で、この硬貨と図像学的に類似するものはないが、紋章はホレズム硬貨とほぼ一致する。このことから、当時チャーチュが政治的にホレズムに従属していた、あるいは、トランスオクシアナのカンゲー（康居）領に

において王家が同一であった、と見なすことができるであろう。

これらの硬貨はきわめて大規模に製造された。タシュケント州で千個以上の一括遺物が発見されており、同州のパナーカト、カンカ、キンディク・テペほかの集落遺跡でよく出土する。当時、チャーチュでは金貨や銀貨は流通していなかった。この地域で発行された硬貨には、地域内の流通しか見られず、地域外にはほとんど流出していない。他の地域におけるチャーチュ硬貨の出土はわずか2例しかなく、フェルガーナと、古テルメズのファヤーズ・テベ仏教複合建造物（アリバウム L.I. Al'baum による発掘）のみである。

チャーチュにおける初期中世は、硬貨の型の多様性に特徴付けられ、この点ではトランスオクシアナの他の地域を凌いでいる [図：硬貨 25, 33～36]。それ以前と同じく、この地域では金貨や銀貨は製造されず、これまでに出土した多数の硬貨は、銅製、より多くは青銅製のものである。これらの硬貨のほとんどに、表面に支配者の正面像、もしくは正面から45度回転させた肖像が見られる。チャーチュで製造された硬貨には、表面に支配者とその夫人の肖像が描かれた一群の硬貨もある。これは、正しくビザンツ硬貨の伝統の影響と認められ、ビザンツ帝国でペアの肖像がはじめて現われるのは、ユスティニアヌス2世（紀元565-577年）の硬貨である。また、猛獣、裸馬、ラクダが描かれていることも珍しくない。そのほかのユニークな図像には、脚を交差させて玉座にすわっている動物的な形態の支配者像や、おそらく神と支配者を示すと思われる2人座像がある。一方、これらの硬貨の裏面は画一的で、中央に様々な紋章、周囲には支配者の称号と名、それに地域名を記したソグド文字の銘文が見られる [Rtveladze 1982; E. V. & L. L. Rtveladze 1976]。

チャーチュ硬貨の図像学的分析によって、トランスオクシアナの他の地域、例えばトハリスタン北部やブハーラーとは違って、これらの硬貨にササン朝硬貨の影響が全くないことが明らかになる。図像的には、支配者の肖像、紋章、周囲の銘文によって、先行するチャーチュ硬貨の地域的伝統に追従していることが明瞭に確認できるが、初期中世チャーチュ硬貨の支配者の肖像は、おそらくビザンツの伝統の影響のもとに、横顔ではなく正面向き、あるいは正面から45度回転しているであろう。

あまり流布しなかったいま一つのチャーチュ硬貨群は、テュルク系支配者によって発行されたもので、中国＝ソグド的伝統に基づく、正方形の穴を有する鑄造硬貨である。初期中世においては、チャーチュ本来の硬貨以外に、テュルギシュの硬貨、ソグドのイフシードたち、特にタルフンやグレクの硬貨、唐の硬貨などがかなり多く流通しており、これらの硬貨は、カンカやハナーバードの遺跡から出土する。また、ペーローズの硬貨を模したビザンツ銀貨やトゥフス族の硬貨がアク・テベ遺跡から出土したことも、注目に値する。

いま、その他のデータがないので量的なデータのみによって判断すれば、全般に、初期中世としては、貨幣経済の例外的に高い水準と、硬貨製造および流通硬貨の多様性が、チャーチュ地域全体について確認できる。この現象は、かなりの部分、まさにこの時代シルクロードの最も重要な幹線がチャーチュを通過していたことによって引き起こされた、と考えられよ

う。

これまでに得られたデータから判断すれば、チャーチュにおける独自の硬貨製造のはじまりは、バクトリアやソグド、あるいはホレズムなどとは異なったパターンを示していることが明らかである。チャーチュでは、ヘレニズム硬貨やその模造硬貨の流通という先行段階なしに、いきなり地域独自の基盤に基づいて、硬貨製造が開始されたのである。

フェルガーナ

この地域における硬貨製造のはじまりは、ウストルーシャナの場合と類似している。紀元後最初の数世紀には五銖銭タイプの中国銭が流入するが、出土することは比較的まれで、当時この地域に貨幣が流通していたとはまず考えられない。これらの中国銭は、シルクロードに沿う全般的な商品流通によって、この地に持ち込まれた可能性が非常に高い。

フェルガーナでは、紀元7世紀か8世紀初頭になって、ようやく貨幣の発展が始まる。このことは、ソグドによる植民地化との関係を否定できないであろう。唐やテュルギシュの硬貨と並んで、スミールノワがトゥトック・オールドのものと見なした硬貨も、この地域で流通した [Smirnova 1981: 341-42]。

このように、これまでに得られたデータを分析すれば、トランスオクシアナ諸地域における、貨幣流通や独自の硬貨製造のはじまりには、バクトリア・ソグド型、ホレズム型、チャーチュ型という、少なくとも3つのパターンが存在したことが明らかである。これらは、編年や発展段階上の相違、硬貨に描かれた図像の類型的な独自性、硬貨の材質の相違といった特徴において、互いに異なっている。ゼイマーリの仮説にある程度合致するブハーラー型の存在を認めることも可能ではあるが、今のところ、最初期の状況が明瞭ではない。

古代・初期中世のトランスオクシアナにおける硬貨製造のはじまりは、上で見たように実に多様であり、本稿で提示された型とは異なる、別のパターンを提示することも不可能ではないであろう。



1

2



3

4



5

6



7

8



9

10



11

12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25





26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



図版解説

1. アレクサンドロスのドラクマ貨. 銀; 2. アンティオコス1世 (紀元前280-261年) の4ドラクマ貨. 銀; 3. ディオドトス (紀元前250-230年) のカルクス貨. 青銅; 4-5. エウテュデモス (紀元前230-200年) の4ドラクマ貨. 銀; 6. エウクラティデス (紀元前190-170年) のオボル貨. 銀; 7. アンティオコス1世の硬貨の模造 (紀元前2世紀初頭). 銀; 8. ヘリオクレスの4ドラクマ貨の模造 (紀元前2世紀末~紀元前1世紀). 青銅; 9. エウテュデモスの4ドラクマ貨の模造 (紀元2~4世紀). 銀; 10. フセイガカリスのオボル貨 (紀元前1世紀~紀元1世紀). 銀; 11. “ヘラオス” の4ドラクマ貨 (紀元前後). 銀; 12. ヘラクレスとゼウスが描かれた南ソグド硬貨 (紀元前1世紀). 銀; 13-14. ヒュルコデスの硬貨 (紀元1~2世紀). 銀; 15. ソーテール・メガス (ヴィマ・タクト) の硬貨 (紀元1世紀). 青銅; 16. カドフィセス2世の硬貨 (紀元1世紀後半). 青銅; 17. カニシュカの硬貨 (紀元2世紀前半). 金; 18. フヴィシュカの硬貨 (紀元2世紀半ば~後半). 青銅; 19. フヴィシュカの硬貨の模造 (紀元3世紀). 青銅; 20. クシャン=ササン朝硬貨 (紀元4世紀). 金; 21. ソグド硬貨 (紀元5~6世紀). 銀; 22. アスパールの硬貨 (紀元4世紀). 青銅; 23. ケシュの硬貨 (紀元5世紀). 青銅; 24. ブハーラーの硬貨 (紀元5~6世紀). 青銅; 25. チャーチュの硬貨 (紀元4~5世紀). 青銅; 26. ホレズムのブラヴィークの硬貨 (紀元7世紀). 銀; 27. ホレズムのシャウシュファンの硬貨 (紀元8世紀半ば). 銀; 28. シャープール2世 (紀元309-379年) のドラクマ貨. 銀; 29. ペーローズ (紀元459-484年) のドラクマ貨. 銀; 30. バクトリアとソグドの追刻があるペーローズのドラクマ貨 (紀元6世紀). 銀; 31. バクトリアとソグドの追刻があるペーローズのドラクマ貨の模造 (紀元6世紀). 銀; 32. バクトリアの追刻があるホスロウ1世 (紀元531-579年) のドラクマ貨の模造. 銀; 33-36. チャーチュの硬貨 (紀元7世紀). 青銅.

参考文献

- Biriukov, V. V. (1995) *Бирюков В. В.* У истоков денежного обращения Средней Азии (К проблеме ахеменидского влияния на генезис монетной формы денег в среднеазиатском регионе). // Нумизматика Центральной Азии. Вып. 1. Ташкент.
- Ernazarova, T. S. & V. D. Kochnev (1978) *Ерназарова Т. С., Кочнев В. Д.* Монетные находки с Кендык-тепе. // Древности Туябугуза. Ташкент.
- Gafurov, V. G. (1952) *Гафуров В. Г.* История Таджикского народа в кратком изложении. Т. 1. Москва.
- Kabanov, S. K. (1977) *Кабанов С. К.* Нахшеб на рубеже древности и средневековья (III—IV вв). Ташкент.
- Kabanov, S. K. (1981) *Кабанов С. К.* Культура сельских поселений Южного Согда III—UI вв. Ташкент.
- Kastal'skii, V. N. (1940) *Кастальский В. Н.* Неизданная греко-бактрийская монета-медаль Антиоха I, битая в честь Евтидема I. // Вестник древней истории. 1940 г.— № 3, 4.

Москва.

- Livshits, V. A. & V. G. Lukonin (1964) *Лившиц В. А., Луконин В. Г.* Среднеперсидские и согдийские надписи на серебрянных сосудах. // Вестник древней истории. 1964 г.– № 3. Москва.
- Masson, M. E. (1928) *Массон М. Е.* Монетные находки, зарегистрированные в Средней Азии за время с 1917 г. по 1927 г. // Известия Средазкомсатриса. Вып. 3. Ташкент.
- Masson, M. E. (1953) *Массон М. Е.* Ахангеран. Ташкент.
- Masson, M. E. (1977 а) *Массон М. Е.* Работы Кешской археолого–топографической экспедиции ТашГУ (КАТЭ) по изучению восточной половины Кашкадарьинской области УзССР. // Археология Средней Азии. Сборник научных трудов ТашГУ, 533. Ташкент.
- Masson, M. E. (1977 b) *Массон М. Е.* Парфяно–согдийские монеты области долины Кашкадарьи. // История и культура античного мира. Москва.
- Masson, V. M. (1953) *Массон В. М.* Редкая среднеазиатская монета из собрания Государственного Эрмитажа. // Вестник древней истории. 1953 г.– № 3. Москва.
- Masson, V. M. (1955) *Массон В. М.* Денежное хозяйство древней Средней Азии по нумизматическим данным. // Вестник древней истории. 1955 г.– № 3. Москва.
- Masson, V. M. (1966) *Массон В. М.* Хорезм и кушаны. (Некоторые вопросы хорезмской нумизматики.) // Эпиграфика Востока. № 17. Москва–Ленинград.
- Pugachenkova, G. A. & E. V. Rtveladze (1983) *Пугаченкова Г. А., Ртвеладзе Э. В.* Об обращении греко–бактрийских монет в Северной Бактрии. // Общественные науки в Узбекистане. 1983 г.– № 5. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. (1982) *Ртвеладзе Э. В.* Нумизматические материалы к истории Чача. // Общественные науки в Узбекистане. 1982 г.– № 8. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. (1984) La circulation monétaire au nord de l'Oxus à l'époque Greko–Bactrienne. In : *Revue Numismatique*, 6 serie, t. 26.
- Rtveladze, E. V. (1987) *Ртвеладзе Э. В.* Денежное обращение в Северо–Западном Тохаристане в раннее средневековье. // Городская культура Бактрии–Тохаристана и Тогда. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. (1988 а) *Ртвеладзе Э. В.* Эллинистические монеты из Северной Бактрии. // Третий Всесоюзный симпозиум по проблемам эллинистической культуры. Ереван.
- Rtveladze, E. V. (1988 b) *Ртвеладзе Э. В.* Монеты Кеша. // История и культура южных районов Средней Азии в древности и средневековье. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. (1989) *Ртвеладзе Э. В.* Селевкидские монеты из Кампыр–тепе. // Общественные науки в Узбекистане. 1989 г.– № 2. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. (1995) Baktria and Parthia. In : Invernizzi, A. (ed) *Lands of the Gryphons.*

Papers of Central Asian Archaeology in Antiquity. Firenze.

- Rtveladze, E. V. & A. Musakaeva (1986) *Ртвеладзе Э. В., Мусакаева А.* К истории денежного обращения в Западном Согде. // *Общественные науки в Узбекистане.* 1986 г.- № 6. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. & N. Nefedov (1995) *Ртвеладзе Э. В., Неведов Н.* Уникальная серебрянная монета греческого правителя из Ер-Кургана. // *Нумизматика Центральной Азии.* Вып. 1. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. & M. Niazova (1984) *Ртвеладзе Э. В., Ниязова М.* Первый клад греко-бактрийских монет из Бухары. // *Общественные науки в Узбекистане.* 1984 г.- № 6. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. & Sh. R. Pidaev (1997) *Ртвеладзе Э. В., Пидаяев Ш. Р.* Каталог древних монет Южного Узбекистана. Ташкент.
- Rtveladze, E. V. & L. L. Rtveladze (1976) *Ртвеладзе Э. В., Ртвеладзе Л. Л.* Цитадель Хан-абад-тепе. // *Древности Ташкента.* Ташкент.
- Smirnova, O. I. (1981) *Смирнова О. И.* Сводный каталог согдийских монет. Москва.
- Tolstov, S. P. (1963) *Толстов С. П.* По древним дельтам Окса и Яксарта. Москва.
- Vainberg, B. I. (1977) *Вайнберг Б. И.* Монеты древнего Хорезма. Москва.
- Zeimal', E. V. (1973) *Зеймаль Е. В.* Раннесогдийские монеты с изображением Геракла и Зевса. // *Сообщения Государственного Эрмитажа.* Вып. 27.
- Zeimal', E. V. (1978) *Зеймаль Е. В.* Политическая история Трансоксианы по нумизматическим данным. // *Культура Востока. Древность и средневековье.* Ленинград.
- Zeimal', E. V. (1983 a) *Зеймаль Е. В.* Начальный этап денежного обращения древней Трансоксианы. // *Средняя Азия, Кавказ и зарубежный Восток в древности.* Москва.
- Zeimal', E. V. (1983 b) *Зеймаль Е. В.* Древние монеты Таджикистана. Душанбе.

(著者：ウズベキスタン共和国芸術アカデミー芸術学研究所)

(訳者：京都大学大学院文学研究科)